

OB会報

湘南サッカー部OB会報 第27号

創部90年に向けて

OB会々長 井上 孝

1921年に、旧制の湘南中学校が創立され、同時に蹴球（サッカー）部が創部されることになり、以来87年を閲し、あと3年余で湘南サッカー部は創部90年を迎えます。

1921年は、実は現在の日本サッカー協会の前身たる大日本蹴球協会が設立され、正月に「ア式蹴球全国優勝大会」（これが、後年、全日本選手権、天皇杯へとつながっていったようである）が開かれたという、日本のサッカーにとってはまさに記念すべき年であった。湘南のサッカーは日本のサッカーと歩みを同じにしているようなものである。同時に、OBの幾人かの人たちがまさにその中に入る人たちであったこともまた、我がOB会の誇りであります。

2001年のOB会報は、創部80年記念号でしたが、その際、柳川会長は「OBは黄金期も、無名に終わった時代のメンバーも、みな等しく同じ思いを持って・・・母校と後輩への限りない愛情と支援を続けてきた」とお書きになっています。1世紀間に近く、一つグラウンドで、ボールを追って走り、蹴って、1

000人からの若者が集まり、そして散じていきました。そこで得た「良い思い」をいつまでも良いことと考え、その思いを後から来る者たちにも伝えようとしてきたのが、湘南サッカー部OB会という団体であると思います。ある固有の集団がもつ価値観（とりわけ歴史を通じて形成されてきたもの）を次世代に継承すべきものというような暗黙の意識を代々の構成員がもったとき、そこにいわゆる伝統が生じるのではないのでしょうか。あるとき、ふとTVで見た場面、伝統職人の紺屋さんが、「伝統とは？」と問われて、「栄養のようなものですね」と答えました。とても印象に残る言葉でした。栄養とは、「生物が外界から物質を摂取し、代謝してエネルギーを得、又これを同化して成長すること」（広辞苑、だそうです。われわれも湘南時代、日々の活動において、また蹴球祭に象徴されるOBとの接触を通じて知らず識らずに、この栄養を摂ってきたのです。現役諸君も是非そうあって欲しいと願っておりますし、OB会はそのことに役立つ必要があると思います。

さて、その2011年には、90年を記念することを行なおうと考えております。上述の80年記念号に先立って、（正確にその年ではないですが）60年、70年の節目には記録を含めてまとめたものが出されております。今回もまず、この10年間の回顧と成果の記録とはしておかなければなりません。さらに、いま述べた湘南サッカーの伝統の礎を作った人や環境はどのようなだったのか、これを機会に、旧制中学校の先輩OBを中心に語っていただいたらいかがかと考えました。OB会名簿の整理・発行や記念行事、等につきましても、会員諸兄のご意見・アイデアを頂きたく存じます。それらを2009年の蹴球祭当日におけるOB会総会にお諮り致したいと考えておりますので、多くの方々に是非ご参集いただきますことも合わせてこの場でお願ひ申し上げます。

そして、やがてくる2021年の創部100年には、なにをしようか！大いに楽しみであります。会員、その家族（子ども、孫、ひ孫？）を集めて、国立競技場でも試合をしようか。いや、湘南のグラウンドをせめて人工芝にでもしてそれができないか？ 栄養をたっぷり摂って、次世代の人たちに考えていただきましょう。



湘南ペガサスSC
現況報告

会長(42回生) 田部井 徹

今年度から牧村前会長の後を受け、湘南ペガサスサッカークラブ会長を仰せつかりました。今やクラブ員は、40代のジュニアチーム、50代のシニアチーム(A、B2チーム)、60代チーム、そして今年から発足した70代チームさらにはサポート会員を含め、約130名の大所帯となりました。これだけの人数を要するシニアのサッカークラブは、日本広しと言えどもそんなに多とは思えず、もしかすると数本の指に入っているかも知れません。

数年前に整理されたクラブ会則も毎年少しずつ手が加えられて年々充実し、クラブ全体の運営は元より、各チームとの連携も大変スムーズなものになってきました。本部の役員体制は、名誉顧問2名(会計監査兼務)、会長、副会長(各チーム代表者の5名)、総務、総務補佐、会計、通信・広報の合計12名となっています。また各チームにも代表の他、監督、総務、会計、広報とそれぞれ役員を配置し、運営に当たってもらっています。

今年度の会則改正の中で、今まで60代チームの方々にお世話いただいていた「サポート会員」(サポート会員とは、各チームメンバーであった者が諸般の事情によりプレーを止め、チームメンバーの登録をせずにペガサス会員を継続する人のことを言います)の位置づけを明確にし、会員とのやり取りは本部の総務が担当することになりました。

チームの方々にお世話いただいていた「サポート会員」(サポート会員とは、各チームメンバーであった者が諸般の事情によりプレーを止め、チームメンバーの登録をせずにペガサス会員を継続する人のことを言います)の位置づけを明確にし、会員とのやり取りは本部の総務が担当することになりました。



ペガサス70活動報告

27回生 山本 修

湘南ペガサス70チームが、今年から公式に発足することになり、今年70才になるメンバー4人を加えて登録23人の体制で、以下の行事に参加した。

1. 70才以上の大会

70才以上対象の行事が年々増える中、以下の4大会に一泊遠征し、6勝3分2敗の好成績であった。参加チームの多くが県選抜や地域連合で構成されている中で、単独クラブの湘南ペガサス70は珍しい存在である。

全国シニア大会 藤枝 5 / 31・6 / 1

東日本ロイヤルエイジ 那須 9 / 5・6

福井ロイヤルエイジ 三国町 9 / 15・16

刈谷スーパーエイジ 刈谷市 9 / 27・28

このほか、70チームとして、以下の行事に参加した

県主催シニアフェスタ 善行 11 / 22

FUS交流会 仙川 11 / 23

2. ロイヤルサッカー東西対抗戦

クラブとして一年間に行う行事は、8月の現役激励会&ペガサス懇親試合、ペガサスサッカー祭、12月の忘年会、翌年1月の蹴球祭(初蹴り)、3月の筑波大附属定期戦と年度末の総会&納会となっています。中でも最大の行事は、8月のペガサスサッカー祭です。ここ数年、湘南サッカー部OB会長でもあります井上先輩に、東海大学の素晴らしい人工芝グラウンドを確保していただき、40代から70代までクラブ全チームが一堂に会して半日試合を楽しみ、大学側で用意していただいたお風呂でひと汗流した後に、懇親会で盛り上がりします。最近の参加状況を見ますと、試合には60名くらいの人が集まりますが、懇親会は50名弱と若干減ってしまいうのが残念です。特にジュニアチームからの懇親会出席者が少なく、もう少し積極的に参加して欲しいと思っています。

める体制ができ上がりました。しかしながらこれからの運営を考えた場合、気になる点がない訳でもありません。一番の問題は、ここ数年ジュニアチームからシニアチームへの移籍が少ないことです。元々であれば、毎年ジュニアチームへの若手入会が、上手く進んでいないことが挙げられます。特に40代は仕事の面でも忙しく、土曜日は仕事となる人も多いようです。たまたま神奈川シニアリーグの運営は、40代は日曜日、50代は土曜日が活動日となっている関係から、50歳を過ぎても土曜日ではサッカーができず、ジュニアチームでプレーを続ける人も増えていきます。したがって、湘南OBおよび友人を含め、若手のクラブ入会をいかにスムーズに進めるかが、最大の課題といえます。

私の場合には、30を超えて神奈川社会人リーグでプレーしていましたが、まさか40歳を過ぎてもサッカーができるとは、思ってもみませんでした。しかしながらいくつかの間にかシニアリーグが発足し、40雀リーグでプレーを楽しんでいるうちに、今度は50雀リーグが発足し、今では60雀リーグまでできています。我がクラブをみても、すでに70代のチームができるなど、健康でありさえすれば末永くサッカーを楽しめる環境が整いました。湘南サッカー部若手OBの諸君、是非湘南ペガサスと一緒にボールを蹴りま

1月19日国立競技場、全国から70才以上167人が集まり、年令層別に12チームが編成されて東西対抗6試合が実施された。湘南OB・湘南ベガサスから13人が参加し、それぞれの年令別試合に出場した。

3 県協会シニア交流会

県協会主催のシニア交流会は、原則70才以上、68才以上許容として、4月から12月まで、火曜または水曜の原則月4回の合計30回、平塚馬入人工芝グラウンドで開催された。

60雀リーグ参加7チームから、湘南ベガサスは単独チーム編成、他の6チームからの参加者は、小田原・茅ヶ崎えぼし・赤羽根連合、横浜・YK・神奈川連合の連合2チームを編成して対戦した。7/16には埼玉、11/11には清水が、ビクターとして交流会に参加した。

4 60才以上大会のロイヤルゲーム
各種の60才以上大会の付帯行事として、70才以上対象のロイヤルゲームと称して親善紅白試合が開催され、ベガサス70のメンバーが、左記に参加した。

Gリーグ埼玉 深谷 4/6
関東シニア埼玉大会 熊谷 10/13

5 その他の高令者対象の行事
60才以上大会の付帯行事として、高令者対象行事がいろいろな年令制限で開催され、湘南ベガサスは以下の行事に参加した。

第5回清水大会67才以上 3/21〜23

清水招待 清水蛇塚 68才以上 10/9



ベガサス60奮戦記
ベガサス60代表 38回生 長谷川十九治

ベガサス60は本年度からベガサス70と新ベガサス60に分かれました。現在の登録部員は60歳から69歳までの22名です。役員は私のほか副代表に小泉(39回生)、監督に宮杉、総務に伊通(41回生)、会計に二木(旧姓井手41回生)、審判委員に折原の体制でやっています。年齢的に病気や怪我に悩まされる時期で常時出場できないメンバーは12〜13人程度でしょうか？

たまにはシニアBで年度内に60歳になれる方やベガサス70チームから応援をいただいています。

ベガサス60の活動は県内の活動と県外の活動に分かれます。県内のリーグ戦は重要試合と位置づけられています。優勝を決定した「茅ヶ崎えぼし」に分が悪く、また「Y・K」にも取りこぼし3勝3敗6分、7チーム中3位で20年度のリーグ戦を終了しました。しかしながら最重要試合の全国シニア60雀の部の神奈川予選では宿敵「茅ヶ崎えぼし」に勝利

し神奈川代表の座を射止めました。11月29、30日に全国大会出場権をかけて千葉県で行われる関東予選を戦います。県外の活動には関東「Gリーグ」(GⅡ)があります。埼玉大会、栃木大会茨城大会、那須大会などに参加しています。そのほか「清水」「葦崎」「刈谷」「菅平」「福島ビレッジ」など各地の招待試合にも遠征します。

直近の「葦崎大会」ではBブロックで1位となり成果を残しました。Aブロック1位「浜松怪童クラブ」との優勝決定戦では、相手にブラジル出身で本田で活躍した元プロ選手の「比嘉」がおり、彼一人にかき回されて1・0で負けてしまいました。比嘉選手は60歳を超えていながらボールキープは抜群、キック力も現役並みにありとても同じ世代と思えないほどの体力でした。我々も見習いたいものです。

60歳を超えるとどうしても体力の衰えを強く感じます。走力、キック力は落ち油の切れた体は敵のフォワードの一発の切り返しについて行けず、コーナーに持ち込んだボールを見事マイナスに折り返すはずが、味方まで届かないか、あえなくゴール後ろにセンターリング、といった

失態が続いています。でもこのことは相手も同じです。気力だけは負けまいと時にはイエローカードをもらいながら若者の気持ちで頑張っているという状況です。

60歳、61歳は団塊の世代です。生まれた時から今日まで大量世代といわれ進学も、就職も、昇進も競争に明け暮れ企業戦士として人生を過ごしてきました。逆境に強く、粘り強く戦うことを得意としています。この特徴を生かし残された試合、そして来年度のリーグ戦優勝を目指して頑張ります。

ベガサスの良いところは40歳のチームから70歳のチームまで40年にわたり年齢に応じたサッカーを楽しめることです。歳とともに勝敗に拘りつつも仮に負けても心の充実を味わえるようになりました。湘南出身者以外のメンバーともサッカーを通じて生涯の友が出来ました。仄聞すれば、働き盛りの40歳チームは仕事と休日のサッカー両立が苦しくて大変とか。ベガサスのサッカーは楽しむことが基本です。仕事のストレスをサッカーで解消できればそれだけでもベガサスの存在価値があると思います。楽しみながらやがて60チーム70チームまで続けられよう期待します。

今年も押し迫りました。本稿をお読みいただく頃には今年最後の試合として全国シニア関東予選で群馬代表、茨城代表、山梨代表に勝利し関東代表権を勝ち取ったことを皆様にお伝えできるはず。よろしくご支援願います。

最後に現在闘病中で11月に手術を受け

られる予定の前代表兼監督牧村氏(37回生)のご快癒をお祈りし筆を置きます。(H20 11 16記)



ペガサスシニアB報告

横山 雅行

平成20年度は60代9名・50代19名、計28名平均年齢58才という陣容でシーズンを迎えた。他チームと比較しての年令的ハンディはかなりきついものであったが、県五十雀リーグ50雀2部において5勝4分4敗(5位)の好成績を収めることが出来た。

初戦の栄光戦に勝ったことで調子の波に乗り、昨年敗れた浅野・藤沢、赤羽根、西湘に2勝1分で雪辱を果たすことが出来た。逆に昨年快勝した中沢、ウイットに敗れ、初顔に弱いジンクス通り新加入の足柄上、早園に1分1敗と勝ち越せなかったのは残念であった。

4月12日 栄光 2・1
シニアAから3名加わり快勝
4月19日 足柄上 1・1
足の速い若手に走られ失点
5月10日 西湘 0・0

小雨の中なんとか凌ぎきる
5月17日 ウイット 0・5
わけの分からないまま失点
6月 7日 浅野藤沢 1・0
牧村・小泉のベテランコンビの素晴らしい得点
6月14日 赤羽根 2・1
馬入天然芝で心地よく快勝
7月 5日 ウェスト 0・0
暑さとの戦いの中、集中切れずドロ
7月12日 早園 0・1
相手のラッキーゴール1本で惜敗
9月13日 県庁 3・0
ループシュート3本?で快勝
9月27日 中沢 1・2
押せ押せの展開の中で痛恨のオウンゴール
10月11日 川崎 0・3
優勝した川崎に完敗
10月18日 グランパ 1・0
追加点が奪えず苦戦
10月25日 綾瀬 0・0
実力伯仲の試合、決めきれずドロ

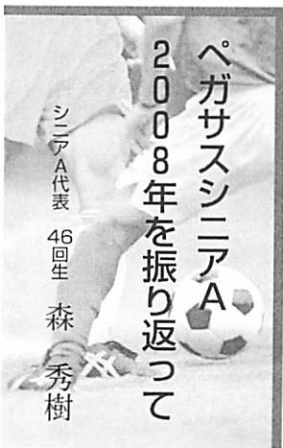
ウイット、川崎戦以外は失点0あるいは1と安定した守備から無失点試合は前年同様6試合であったが、逆に無得点試合も6試合を数えた。やはり例年の課題である得点力不足に今年も悩まされた。来年度はシュート数を増やすところから改善していきたい。

他の公式戦では全国シニア予選リーグが行われている。シニアBの所属するグ

ループは1部所属の強豪が多い中、1・2平塚・1・2ボロンズ・1・1小田原・0・0多摩・0・1ドリウムと2分3敗ではあるが好勝負を展開している。11月下旬から県議長杯トーナメントも開催される。

シーズンは終了していないが、今期を振り返ると人数確保との戦いであったように思われる。シーズンを通して病気・怪我で参加できないメンバーが常時2〜3名あり、60の試合が土曜開催なので重複する場合も多く、毎試合12〜13名がいいところで11名の試合も何度かあった。特に、5月の連休から11週連続で県リーグ・シニア予選・古河大会と続いた時は、正直不安であったがなんとか乗り切ることが出来た。少ない人数が逆に試合での結束を固め好成績に繋がったのかも知れない。

シーズンを通してペガサスシニアBの信条である「サッカーを楽しむ」ということは間違いなく達成できた。来年度も五十雀の若手?チームを相手に、楽しみなながらも勝つサッカーを展開していきたい。



ペガサスシニアA
2008年を振り返って

シニアA代表 46回生 森 秀樹

2008年シニアAの神奈川県シニア五十雀1部リーグは、昨年同様前半は黒星が先行して苦しい展開。しかし、新戦力がなじんできた後半に連勝して最終成績は5勝4敗2分前で、昨年より1つ多く勝つことが出来ました。順位は昨年と同じ6位という結果でした。今年のリーグ戦で特筆すべきは、得点力が上がったことです。得点18、失点13で+5でした(ちなみに、昨年の得失点差は-4)。しかし、まだまだ失点を抑えることが出来ると思います。ボールを奪われた瞬間から守備をする、最前線から守備の意識を強く持って今後の試合に臨みましょう。

今期は、昨年まで守備の中心でセットプレーでの得点も多かった福永が体調不良でほとんど参加できず、森がセンターバックに入る試合が多くありました。滝澤とのバックコンビはかなり安定していたと思います。サイドバックは、小泉と吉田が先発で、こちらも安定していました。リーグ戦終盤は善積がスイーパーに定着し、落ち着いたボールさばきでさらに安定したバックラインとなりました。中盤は、関、上田、阿波の3人が中心。昨年ほどの得点力は無かったものの、攻守にわたり奮闘し、ゲームづくりの重要なポイントとなりました。フォワードは、坂部、小澤がサイドライン沿いを縦に走りセンターリングを上げて攻撃の形

を作りました。リーグ戦終盤は吉田(三兄)、石川が入り、積極的な仕掛けで得点力がアップしました。相手チームの分析、試合毎の戦術については関と野口が貢献してくれました。名前を挙げなかったメンバー諸氏もサブとして、時には先発として活躍してくれました。ありがとうございます。

今期は、全国シニアと神奈川県議長杯が残っています。出来るだけ勝ち星を重ねて行きたいと思います。

ペガサスは40代、50代、60代、そして70代とサッカーを続けることが出来る素晴らしいクラブだと思います。今年も大きな怪我也なく、シーズンを通して元気にサッカーを楽しむことができたことに感謝し、来年はさらに五十雀1部リーグの上位を目指して頑張りたいと思います。



ペガサスジュニア 活動報告

52回生 志水 利彰

ペガサスジュニアの監督を仰せつかっている五十二回生 志水です

今期の活動について報告します。先ず今年は新戦力として四名の方々を迎えるこ

とになったことが大きな変化です(湘南OBが二名、現メンバーと繋がりのある方が二名です)。ここ数年平均年齢が毎年約一歳ずつ高くなっていったのですが今年若干ですが、若返りができました(正確に計算したわけではありませんが)。とは言っても、同じ三部の中では年齢が高い方ですのでこの会報をご覧になった四十歳前後の皆さんの参加をお待ちしています。

さて、活動の中心の神奈川シニアリーグ四十雀三部での成績は二勝五敗四分勝点十で、十二チーム中十位でした。結果だけを見ると昨年の五位を下回っていますが、試合内容は大分変わって見えます。試合順に簡単に振り返ってみます。

初戦は中沢戦でした。久しぶりの試合、新しいメンバーの加入、前シーズン大量得点した相手だった等の色々な要素が絡んだのだと思いますが、試合開始から相手のペースになってしまい、最後までペースを取り戻せず一対四で完敗しました。一試合雨天で流れた後の第二戦は強豪の横浜OBとあたりました。初戦の反省から積極的な守備とボール保持からの思い切った攻撃で戦うこととしました。結果は二体二の引き分けでしたがこの戦い方が通用し勝利まで後一歩でした。続くLusitania戦は今期の戦い方が皆

の共通理解となり、完全に湘南ペースで進みましたが、あと一歩が足りず無得点で引き分けでした。この二試合で勝ちきれなかったのが今年順位が低迷した一つの理由です。改めてリーグ戦の戦い方の難しさを実感させられました。次は駒寄でこの試合も十分勝機がありながら一対二で負け。第五戦は今期若返った南足柄に二対五で負けとなかなか勝ち星が挙げられませんでした。前半最終戦の高麗戦は暑い中でも全員が集中し相手の激しいプレーにも落ち着いて対応して好試合を展開しましたがこの試合も勝利の女神が微笑まず、またもや二対二の引き分けで前半を折り返しました。

後半戦の初戦はウィットマスターズ戦で前週のペガサス祭りで練習試合をした成果が現れて三対一で快勝しました。がこの試合で中心メンバーの一人が負傷退場するアクシデントがあり、残り試合の出場が危ぶまれる状況になりました。続く赤羽根戦は苦戦を強いられましたが何とか一対〇で連勝しやっと両目が明きました。残りの三試合も苦しい試合が続きました。強豪港北には審判からナイスゲームと声をかけられた両チームがつぶり四つの試合をできましたが結果は〇対二。続いてここ数年相性の悪い浅野戦では驚異的な回復力で負傷から復帰したメンバーを投入して優勢に試合を進めまし

たが点を取りきれず同じく〇対二と連敗。最終戦のテヴェントス戦は大量失点負けをしなければ残留確定という状況の中で全員の意味統一ができた試合運びで二対二で引き分けました。

リーグ戦の十一試合を総括すると去年より良いサッカーができたのですが結果が今一つついて来なかったということです。その理由の一つにやはり平均年齢の差があります。

繰り返しになりますが、この会報を読んでシニアサッカーに興味を持たれた方はぜひ参加をお願いします。一年に十一回、六十分間、全く他の事を忘れてサッカーに集中することで、大げさな言いと、生活に張りがでてきます。負けたあとの一週間はちょっと気分が落ち込みますが、・・・以上が、今期の報告です。



県リーグ昇格を目指して トトカルチョ湘南

橋本 諭

2部リーグ昇格。これが今年のトトカルチョ湘南の目標です。

去年のトトカルチョの成績は、2部リーグでわずか1勝しかできず最下位。まさ

かの3部落ちをしてしまいました。3年前までは1部リーグにいたチームが最下位リーグまで落ち込むという事態、先輩方が創設し、長年守り続けてきた県リーグでの地位を守ることができませんでした。

しかし、考えてみると、去年のチーム状態からすれば当然の結果だったのかも知れません。チームメンバーの多くが社会人になり、リーグ前半は多く集まっていたメンバーが、後半になるにつれ減少。試合の前日まで出席人数も分らず、キーパーもいない。「これじゃ勝てないな・」という雰囲気が出た試合前から立ち込めていました。改善策を誰も講じないまま次の試合、また次の試合とバタバタと負け越し、気づいたら最下位。「試合に勝つ」ことを忘れてしまったまま、最後までチーム状態を立て直すことが出来ませんでした。去年のチームは、1つのチームというより、寄せ集めの集団でしか無かったような気がします。県リーグの試合に勝てなくなってしまう原因が、個々のサッカー技術にあつたなら、チームまたは個人として納得することが出来たと思います。しかし、今回は明らかにチームの運営を人任せに過ぎた結果ではないか思います。チームのメンバーが集まらない状況も、誰かが来てくれるだろうではなく、自分が何と

かしてやろう、と皆が思っていればチーム状態は大きく違っていたでしょう。

今年は、去年のようなことが起きないよう反省し、毎試合個々の個性に合わせようポジティブな程ではありませんが、新規加入の若い大学生も増え、出席人数も安定してきました。まだ全体での練習量不足、コミュニケーション不足などの課題があり、トトカルチョ湘南の本調子ではないと思いますが、5月から始まった3部リーグで全勝、2部昇格トナメントに進出することになりました。1月から始まる2部昇格トナメントは今までの闘って来たチームより強いチームと対戦することは間違いなく、リーグ戦より厳しい試合になると思います。しかし、「勝ちたい」気持で負けることなく、2部昇格を果たしたいと思えます。

現在、トトカルチョ湘南は登録人数が30人、試合毎回参加できる人数が15人。そのうち学生半分・社会人半分といったところ。年代は19、30歳程度ですが、近年新規加入のメンバーが少なくなっているように思います。先輩が怖い、厳しい、と言ったイメージで、加入を拒む人たちもいるようです。県リーグでこれから、また強いチームとして勝ち残って行くためには、後輩達が入りたくなるようなチーム作りというのも考えていかなければいけません。県リーグに参加して上を目

指すチームメンバーとして甘い考えを持つた人はいませんが、日々忙しい中、サッカーが好きで集まっている人達です。怖い、厳しいと言ったことはないと思えます。イメージで決めてしまおうのでなく、積極的に参加しに来て欲しいです。

そうは言っても、今期は3部リーグ。トトカルチョは弱いから入りたくないといわれないう、今年度は2部に昇格できるような、チームを立て直していきたいと思えます。



48回生 吉田 弘

54歳、サッカー再始動

このたびOB会報への原稿依頼をいただいて、まず思い起こしたのは岩淵二郎先生がかつて何かの所に「吉田のような者がOB会を手伝ってくれればうれしいのだが？」とおっしゃっていたのだ。そのお言葉である。諸般の事情により先生のご期待には沿えないままに数十年が経過した訳だ。ところが、平成19年になって、「翌年の20年が私達48回が総会の学年輪番幹事だから下見に出席しろ」と同期会長から言われて出た湘友会総会

後の懇親会の席上、日本史の恩師J先生から「企画広報委員会のE委員長を手伝え」との厳命をいただいた。私はかつての岩淵先生のお言葉だと思って即座にお引き受けした。しかも、E委員長はサッカー部OB会会長の井上孝先生と同じ36回回のお仲間だ。縁にも恵まれた。

さて、本題のサッカーの方だが、同期の関君に励まされて、毎年の勤労感謝の日開催される大会に数年続けて出させていただいたことを契機に、ペガサスシニアAの補欠キーパーとして使っていたことになった。試合前に入念にアップをしないと怪我をするからと言われてアップをすると試合でゴール前に立つ頃にはすでにバテてしまっている。

しかも、ファイブステップなど現役当時の古いルールが頭と体にこびり付いているから、なかなかペナルティエリアギリギリまでボールを持って走ることに抵抗を覚えてしまうことになる。飛んでくるボールは自分の想定よりも早く胸元に来てしまい危うく取り損ねそうになるし、ゴール前から飛び出してキヤッチするかゴール前で待つてセーブするかどっちにしようかと躊躇している内に頭越しにゴールを決められてしまったことも何度かある始末だ。

ボールをキヤッチした弾みに地面に倒

れ地面と胸との間に挟まったボールに強打されたり、左にセービングしようとして左手を日常生活では滅多にしない大きく開いた格好で地面に倒れて左肩を痛めたりして悪戦苦闘している。

しかし、お陰様で二年先輩の森監督の優しいご配慮、チームメイトの行き届いたサポート、正ゴールキーパーの的確なアドバイスもいただいて、幸い大きな怪我には至っていない。これも湘南のグラウンドで中先生の高校日本一のご指導をいただいた賜物だと改めて36年ぶりに感謝しているところである。

今、最大の悩みは湘友会の活動とペガサスの活動が重なる日が少なからずあることだ。その悩みを抱えつつ今年もまた勤労感謝の日にグラウンドに立てることを感謝している。



60回生 武井 基純

シューズをはじめサッカー用具を20年ぶりにそろえて、初めてペガサスの試合に出たときは、「サッカーのフィールドはこんなに広かったかな？」と自問した。

フィールドの広さについては、何試合か参加するうちに、合点がいくようになったが、「こんなに蹴れなかったかな？」

「こんなに止まらなかったかな？」
と、基本的なスキルについてもすぐに意識するようになった。

しかも今どきのサッカーでは、「ボゼッション」や「バイタルエリア」という、20年前には聞いたことの無かった言葉で表現される、素早い寄せや狭いエリアでの展開を可能にするような走力やスキルを要求されるらしい、ということも徐々に理解してきた。

「走れない・・・どうでしょうか？ 昔から走るの好きではなかったけど・・・」と、練習すること以外に解決方法が無いことを認識する知恵だけがついた20年間で、肯定的でしょうか、反省しようかという決着もつけないままに、ボールを仲間と蹴る楽しさに再び目が向いている。

高校時代でも私が練習好きだったという事実はないが、毎日仲間とサッカーをしていたという記憶がとても楽しいものとして頭に残っている。

今、ペガサスジュニアで新たに知己を得て、プレーをする楽しさに触れる幸せを再び得ている。

サッカーを再び始め、私の機嫌がよく

なったと妻も評価しているようなので、サッカーを再び始めると、本人が感じている幸福感が身近な人にも伝わるという思わぬ効用があることを、新たにペガサスに加入した人間が時に皆様にお伝えすべきことだと思いい、ペンを執りました。

(武井さんは今年からペガサスジュニアに参加しています。40雀では最も若い湘南高校OBで、今回原稿をお願いしました。編集部注)



43回生 加納 正道

私はスポーツドクターとしてモンテディオ山形(神奈川県)の試合でドクターとしてベンチ入り、中学の後輩小柴監督がいた時の逗葉高校(高校選手権、インターハイ)、2002年のU17日本代表アメリカ遠征、2006年度の神奈川県U17(国体少年)チーム、そして今回は湘南高校(スペイン遠征)と、いろいろなチーム、選手を見てきました。そして若い選手の育成はなかなか難しいと感じていた時に、選手育成に定評のある、スペイン ビルバオに湘南の選手たちと一緒に行ったのは楽しかったし、良い経

験になりました。

スペインで感じたことは主に3つあります。

1. 基本的に忠実

リアルソシエダやビルバオユースとの試合を見た第一印象は相手の選手は基本的に忠実だと感じました。奪ったボールは、トップ又はサイドに当てさらに走って貫いて行く(パス&ゴー)。ぬかるんだ悪いグラウンドでも、ボールを受けた選手はしっかりと止めて次のプレーを行う。トラップが正確で、パスが強く速い、ミスが少ない。特に素晴らしいプレーをするわけではないのに、湘南は(体力差もありましたが)歯が立ちませんでした。グラウンドを広く使ったサイドからの攻撃も、印象に残りました。

2. モチベーションの重要性

対戦した選手たちはプレーを認められてプロになりたい、という気持ちが強いのだと思います。点差がついても手を抜かず、一生懸命プレーしていました。また独立運動もあるバスケットの代表というナショナルチームも強いのだと思いました。

3. オフサイドを取らない、個を強くする。

スペインの試合では副審をおかずに主審一人でジャッジを行ったので、明らかにオフサイドも見逃されることが何回かありました。若い時は個人の能力を高め、1対1に強くするのに主眼を置いていたと思います。最近抜かれそうに

なったら、相手のユニホームを引っ張るなどのファウルで相手の攻撃を止め、指導者も抜かれていれば決定的なピンチだったとファウルを正当化することがあります。若い時はデیفエンスではいかにファウルせずに相手からボールを奪うか、失点を防ぐか、などの技術を覚えるべきだと思います。また接触プレーに強くなり、簡単には転ばない選手を育てて欲しいと私は思っています。

またジュニアの練習を見ても、パスが強く速い、そしてそのパスをしつかり止めて次のプレーに繋げる。そして相手を意識させた練習を多くさせていました。試合の中で正確で強いキック、次のプレーに繋げる正確なトラップ、プレッシャーの中のシュートなどの基本技、広い視野と早い状況判断力など個人の能力を高めることが、チーム力の向上に繋がると思いました。

ドクターとしては最終戦で骨折者が出て、予定外のスペイン病院見学も経験してきました。そしてスペイン最後の夜は、バルセロナのウォーターフロントのレストランで美味しいシーフードとワインを頂きました。貴重な経験をさせていただき有り難うございました。

我々の頃はサッカーに関する情報も少なく、無我夢中で中さんに言われるがままに（出来たかどうか分かりませんが）

プレーして、全国大会、関東大会という結果がついてきて、社会人になってからもこの結果が自信となり、社会人として頑張れたと思います。遠征に参加した選手は、この貴重な経験を元に、選手としてまた将来は社会人として活躍して欲しいと思います。



2008年
スペイン遠征報告
48回生 関佳史

3月26日（水）から4月6日（土）まで、10泊11日の湘南高校サッカー部、スペイン遠征に同行しました。3回目の今回は、諸事情により、学校主催の行事という位置付けとなり、公式の学校訪問が組み込まれます。また、旅行中に11年間務められた清水先生が二宮高校へ異動することが発表されるなど、あわただしい中の旅行でした。

生徒39名に、学校からは清水先生、OB会からは鈴木中先生が団長、ドクターで加納さん（43回）が同行、関と篠塚コーチ（54回篠塚さんのご子息、大学1年）のほか現地で渋谷君（36回渋谷さんのご子息、大学1年）が加わりました。

この二人はスペイン経験者です。このほか、この旅行をコーディネートする嶋貴さん（清水先生の同郷で、元読売クラブ）という強力な助っ人がこの企画の核心を創っています。そして、JTBからも1名添乗で参加。

旅行は、4つの試合と各地の見学・観光で構成されており、サッカーの試合での強化、サッカー文化の吸収のほかにも、初めて海外の文化に触れるという意味で充実した内容になっています。サッカーの試合だけやり、少しの買い物時間が与えられるというものではなく、テーマに添った見学、学校訪問、フリータイムでの自分たちでの行動計画など、国際感覚を養う端緒としては、うらやましい限りのプログラムで、湘南高校の生徒だから、受け止めてこなせるレベルであると思います。

今回、ベースとした宿はビルバオ近郊のプレンシアという町のスポーツ合宿施設です。プレンシアは、大西洋岸の海辺の入り江の奥で、丘に囲まれ、葉山のようなりゾート感覚ののんびりした町です。地下鉄でビルバオまで約40分と交通の便も悪くはありません。初戦は、3月28日（金）、このプレンシアの地元チームで、県リーグの1部です。この相手にはA、Bチームともあぶなげなく勝利しました。（Aは2・0）グラウンドのそばに

は更衣室とバーがあり、300名程度の屋根つきスタンドの人口芝グラウンドで、子どもからお年寄りまで200名くらいの観戦の中で試合でした。日本では考えられない状況の中で試合で、地域に根付いたサッカー文化の深さを再認識しました。

このあと、3月31日（月）から、3日間で3試合を行います。こちらはハードな相手でした。今回初めて対戦するレアル・ソシエダ、毎回対戦しているアスレチック・ビルバオのユースの2チームは、スペインを6地区に分けた地域リーグに所属し、この年代では最高レベルです。

昨年、レアル・ソシエダは、リーガ・エスパニョーラの2部に落ちましたが、ずっと1部におり、リバプールのシャビ・アロンソを輩出したチームです。バスケットでは第2の都市・サンセバスチャンを本拠として、財政的に苦しいチームは、この地方でNO.1のA・ビルバオによい選手を持つていられることの繰り返しだそうですが、練習施設はビルバオに劣らないものでした。ここのユースとは、雨で水を含んだ天然芝のグラウンドで0・6の負けでした。初めて当たる本場にハイレベルな相手で、大柄でプレーの幅の広い選手への対応が難しく、慣れない芝の状況もあり、厳しい試合となりました。

翌日は、Aビルバオ戦。Aビルバオはバスケット地方のシンボルとなるチーム。以前はバスケットしか入れず、1部から落ちたことがない強豪です。最近では、バスケットで生まれれば、人種を問わず受け入れられる方針となり、相手のユースには黒人選手もいました。

こちらは、ビルバオ空港そばのレサマという町の練習場でのゲーム。相手チームのレベルにも慣れ、人口芝のコンディションもよく、相当に対応ができるようになり、湘南チームは、内容としては相当に進歩していました。90分ゲームで、相手は3チーム用意し、30分ごとに交代するという変則マッチで、体力的にハンディがあり、結果としてスコアは0:7でした。

3連戦の最後となるのが、バルセロナの県リーグ1部所属のユニオン・エスポルティバ・コルネリアというチーム。試合当日のあさ5時、ビルバオを出発してバスで600Km先のバルセロナに入るといふ強行日程で、疲労の中での試合となりました。相手は、前2戦に比べると格落ちで、最初20分は0:0でいい勝負かと思われました。しかし、運動量が落ちてきたところで失点を重ねて、終わってみれば0:5というスコアでした。この試合では、シュート・チャンスも相当地に作りだすことができ、大きなスペイ

ン人のプレーの幅にも慣れてきたところ。伯仲した内容になったためか、相手は体をはってきて、湘南側で1名の骨折者ができました。加納さんの速やかな対応で、措置をしていただき、負傷者はその後の旅程にも車イスを手配して参加することができました。

リアル・ソシエタとの試合があとから決まったこともありですが、(試合を受けてもらったことが大きな名替であり、立派な実績)、結果としては、3日で3連戦はきつかったかも知れません。Aチーム4試合、Bチーム3試合で2勝5敗という結果でした。

試合以外でも、各地の見学や学校訪問は充実した内容でした。

ビルバオのあるビスカヤ県の見学では、第二次世界大戦でナチスドイツから空爆を受けたゲルニカを訪問し、本で読む世界史よりも目でみて歴史を理解してきたと思います。世界史を学ぶ前である生徒も多いはずですが、単一民族国家の日本では考えられないことが、海外では起こることが実体験できたのではないかと思います。

サンセバスチャンでは、「イカストラエキンツィア」という学校を訪問しました。ここは3歳児から高校年代が通う学校ですが、すでに日本の学校との交流実績があり、準備は周到でした。同年代の

高校生が用意した質問を英語で行い、湘南生が答えるということで1時間近く交流を行いました。湘南側は、質疑応答の準備をしていますが、帰国子女の生徒が通訳を行い、両者のコミュニケーションがうまくいきました。おそらく湘南生も英会話の必要性を感じたことと思います。

同じく、サンセバスチャンでは、チョコ(日本では美食クラブと訳されているそうです)の訪問を設定していただきました。食へのこだわりの強いバスケ人が、男だけで集まり、とびきりの食材を持ち寄って自分達で料理を作って楽しむクラブです。地下の特別の部屋で、手づくりのパエリアをご馳走になりました。

このほか、リーガ・エスパニョーラのリアル・ソシエタのホームゲームに招待され、1部昇格がかかるゲームを観戦。Aビルバオの本部にも、今回初めて訪問をしました。こちらは、ビルバオの中心街にある一戸建てで元高官の別邸で中国風の門や内装を持つ、エキゾチックな建物です。一般に公開されているものではなく、特別に案内をしてもらいました。

最後には、バルセロナ、パリで自由行動の間をとり、自主的に計画をたてて観光を行ない、無事に日程を終了しました。高校生にとつては、大変貴重な体験であったと思います。2年生12名、1年生24名

のほかに参加した女子マネージャー3名の頑張りも特筆に値するものでした。

さて、本隊は4月4日(金)に、パリを出発して帰国。鈴木先生と関は週末、松井選手のル・マン戦観戦のため、パリで1泊し、リヨン経由でサンテ・ティエンヌへ向かいます。炭鉱の町、サンテ・ティエンヌは、80年代にはプラティニを擁してリーグ優勝した名門チームで現在リーグ5位。熱狂的なファンの応援が物凄く状況です。アウェイのル・マンは松井の組み立てから1点先取するも、4:1で逆点されて破れました。

その後、松井選手はサンテ・ティエンヌに移籍することになります。

鈴木先生は、サッカー、お絵かきの両方で堪能されたことと思います。また、関は、前神奈川県サッカー協会会長の鈴木先生の付き添いということで会社の理解が得られ、長期の休暇をとることができました。このような機会に、得難い体験ができたことに感謝しています。

清水先生が異動になられたあと、厚木北高校から転任された小林先生が監督、もともと湘南におられた曾根先生が部長という態勢で、今後の部活動が運営されます。小林先生は、海老名高校卒鈴木中先生が校長のとき在学、日大サッカー部清水先生の後輩という経歴です。曾根先生は、相模大野高校でサッカー部

顧問を長く務められたとのことで、お二人での指導となります。OB会事務局とのコミュニケーションの場をつくり、スペイン遠征の今後についても相談をしていきたいと考えています。



2008年スペイン遠征にコーチとして同行させて頂きました。私にとって前回(選手としての)の参加に引き続き、2度目のスペイン遠征です。指導者として、前回と違った立場からスペインのサッカーに触れて感じたことを報告します。

今回の遠征は前回以上にハードスケジュールでした。(遠征8日目、8時間に及ぶバス移動の後休む間もなく試合、など。)親善試合の相手も強豪揃いで、選手たちにとっては様々な面で厳しい遠征だったと思います。選手たち自身の休養の取り方や食事への配慮が欠けていた部分もありましたが、全員が良い経験をしようという自覚を持って行動し、全日程をこなせたことで有意義な遠征となりました。

現地での対戦相手は 'Athletic Bilbao'

Real Sociedad de Futbol) といったスペインリーグチームの下部組織、さらにバルセロナ県リーグ1部に所属し、プロ選手を数多く輩出している Unio Esportiva Cornellà、といった各県のトップレベルのチームです。個人の能力が高く、特に細かいフェイントの入れ方や周りを見るタイミングなど、オフENSEの個人戦術について多くのことが学べたと思います。ディフェンスにおいては個人の能力に依存する面が大きく、組織的で堅実な守備からゲームを組み立てる湘南高校とは対極的でした。湘南高校が目指すサッカーはスペインのようなサッカーとは違う(と私は思っています)ので、選手たちは、現地のチームから何を学べるか、考える必要があったでしょう。

どの試合でも個人の能力の差を感じさせられ、結果は大敗。しかし、体格、身体能力、個人技術の差にも関わらず、自分たちでボールを保持しながら相手の状況を落ち着いて確認し、スピードの変化から相手DFラインを崩すシーンも多く見られました。現在の二年生(当時一年生)が多いチームでしたが、厳しいコンディションの中でも日々の練習の成果を出せていたことから、これからの成長が期待できる内容だったと思います。

今回の遠征では厳しいスケジュールの中幸運にも、Unio Esportiva Cornellà

との試合の際(8日目)、このクラブチームの練習を見ることができました。幼稚園生から小学生の選手たちが順番に、各学年いくつかのグループに分かれ高校生年代のコーチがついて練習を行う、という形式です。少人数での練習なので、選手のプレー機会が十分確保されていました。低学年のトレーニングには、「ステップワークを入れてからの1対1」などの、単純な練習にマーカーやハードルによって多様な動きを取り入れるということが行われておりました。この年代には、複合的な練習が良いということでしょう。5、6年生は、階段・坂道でのインターバル走や、ピッチサイドでの長距離走で心肺機能を強化。彼らは、(湘南の選手にとってもハードなほど)走り続けていました。高学年は持久力がつき易いので、しっかりと走り込ませることが基本のようです。

ここでの練習で特に印象的だったのが幼稚園生、小学生低学年の選手です。ドリブルやキックが非常に上達し、ボールを奪う、ゴールを奪うことに対して積極的で、日本の小学生が3、4年生で出来ることを彼らは小学生になる頃までには出来あがっているようです。この選手たちの練習を目的にしたりし、幼い頃の練習環境、反復練習、運動経験、の重要性を実感できました。

それと同時に私は、湘南高校を神奈川のトップを狙うチームに成長させることで、ユース年代でも成長できることを確認したいと感じていました。スペインの選手の個人能力は素晴らしいと思います。が、コミュニケーション能力やチーム内の意思統一によって勝つこともサッカーの楽しさです。湘南の選手たちは、今は決して高い能力を持っているわけではありませんが、技術と社会性の両方を伸ばすことで高い目標を達成できるはずだと思います。今回の遠征で、「湘南高校の選手は人と人との繋がりを土台としてサッカーをすべきだ」と感じました。

今回の遠征では、前回以上に良い経験をさせて頂きました。遠征について報告したいことは書ききれないほどありますので、これから選手たちがどのようなサッカーをし、遠征の経験をどのように役立てるのか、OB会の皆様ぜひ見てくださいと思います。



ビルバオチームと



ブレンシアチームと



バルセロナにて



藤沢本町から マラカナンまで

48年生 細川 周平

数ヶ月前、現役時代のスコアブックが発見され、インターネットで閲覧された。かれこれ四〇年ほど前の試合になる。送ってくれた同窓の関佳史は当時の先発メンバーや得点パターンを読みながら、チームの流れを解説してくれた。ほくはというと相手高校の名前に記憶があっても、試合のことはとくに忘れていた。残念ながら万年補欠だったから、スコアブックに名前は残っていない。試合よりも練習や合宿や相工大付属へのラニングなどのほうが印象深いのは、仕方ないことかもしれない。先日、同じボジションを争った(?) 山口郁夫と浜松ではほぼ十年ぶりに再会した時には、昔話に花が咲いた。二人ともなぜだか、音楽関連の仕事に進んだのは何かの縁というものだろう(ぼくは歴史研究、彼はヤマハのブリュッセル支店でピアノリストのサポート・システム構築)。

入学した年(一九七〇年)にメキシコでワールドカップが開かれた。ペレを擁するブラジルが完全優勝した大会で、三

菱ダイヤモンド・サッカーという今では伝説的なテレビ番組で録画放送された。部員が何をおいても見るべき番組だったが、ある時、三年生の上野キャプテンが練習の終わりに曰く、基本さえ守れば(つまり鈴木中さんの言うことをきちんと実行できれば)、ブラジル相手でもパスを通せるかもしれないし、ゴール前で攻め込んで一点取れるかもしれない。こう語ったのを鮮明に覚えている(数年前、中さんの古稀祝いで上野さんにこの話をしたが、本人は記憶にございませんとのこと)。県大会準決勝まで進んだチームのキャプテンは、一年坊主からすればいぶん大人、ボールさばきの技術だけでなく、考えていることも違々と尊敬した。

この時のブラジル・チームは今でもメンバーの名前をGKから順に挙げられるほど強烈に覚えている。サッカーがどのスポーツよりも美しいと確信しているのは、あの一人のおかげだと思う。その時から今まで、ナショナル・チームでは一貫してブラジルびいきできている。

一九九〇年の正月、藤沢本町に住む中学時代の友人とばったり会った。彼が管理人をしているアパートに、日系ブラジル人の出稼ぎが固まって住んでいると聞いて、好奇心がくすぐられた。会って話してみると、ブラジルでも日本と同じよ

うな歌や食べ物や読み物が行き渡っているという。それにがぜん興味が湧いて、翌年、ある奨学金を得てサンパウロに住む機会を得た。日系人の音楽文化の研究を口実に永年憧れた国に行って、サッカーや音楽三昧の暮らしをしてやろうとたくらんでいたのだが、いざ行ってみると、ほとんど手つかずの日本語の新聞雑誌が山のようにあり、目を輝かせた。インタビュもうまく段取りができ、調査に熱中し、サッカーについては、時たま有名な競技場に何度か連れて行ってもらったのに留まった。ちょうど、Jリーグが開幕した年で、ジーコやカズの活躍を日曜朝の録画番組で時々見た。国技がブラジル人の足によって日本にも伝道された地元の人は考えていたが、こう言うてやった。日本でも競技者や観客層は前からいぶん厚かったのを知らないのか、このほくでさえ昔はボールを蹴っていたもんだ、メキシコのメンバーを覚えていたかい、フェリックス、カルロス・アルベルト、ジェルソン……。上手に歳を取ったトスタが解説者としてよくテレビに出ていたのは嬉しかった。

ブラジルにはそれから何度も出かけ、『サンバの国に演歌は流れる』(中公新書)、『シネマ屋ブラジルを行く』(新潮選書)、そしてこの七月、『遠きにありてつくるもの』(みすず書房)を出版した。

音楽史から始まった経歴だが、最近十年はこのように日系ブラジル文化に足をつっこんでいる。まっとうなインスタテック・キックを出来なかった足だが。

ブラジルではいつも短時間に資料を集めるのに忙しく競技場に足を運ぶことはなかったが、今年の一〇月には珍しく「聖地」マラカナン競技場でフラメンゴ

対ヴァスコの試合を見る時間ができた。地下鉄駅を下りると、もう遠くからサポーターがサンバのリズムでときの声を上げて聞かされてくる。切符売り場付近で数百人のヴァスコ連中が氣勢を上げていたのだ。選んだわけではないが、人の流れに乗っていたら自然とヴァスコ側に着いたわけだ。観客席で次々に繰り出す応援歌や叫びに包まれながら、その場限りのヴァスコ・サポーターとなつて一体感を味わった。リオの四強の一角とはいえ今年は二部落ちしそうで、優勝トーナメントに進めそうなフラメンゴに押される場面が多く、応援席は緊張と落胆が続いた。ブラジル最大のファン層を持つフラメンゴの統制の取れた応援はつとに有名で、反対側のスタンドは華やかだ。そちらに行けばよかつたかなとちよつと後悔した。

近頃はボールのことを考えることはあまりない。蹴る方とはとくに落伍しているが、見る方も四年に一度しか熱を入れ

ることがない。しかし久しぶりに熱狂に包まれ、昔よく行った国立や三ツ沢を思い出した。それから炎天下の湘南のスタンドを思い出した。もうずいぶん足を運んでいない。おかげで思い出が積み重なった懐かしの場所としてしか思い描けない。青春の聖地というところか。



はじめに、OBの皆様には心強いご支援をいただきありがとうございます。部員一同、この恵まれた環境で練習できることを大変幸せに思っています。

「湘南高校でサッカーをやりたい！」集まった仲間と学校生活のほとんどをグランドですごす毎日です。

OBの方々も応援に駆けつけてくださった9月14日の対横須賀戦で三年生が引退して、小林先生をはじめ、曾根先生、OBコーチの方々のもと新しい湘南高校サッカー部が活動して二ヶ月が経ちました。小林先生からの「サッカーを通してよき社会人となる」という静かで揺るぎないご指導は、自分たちが今まで理解し実践していた「サッカー」というスポーツの認識をかえることになりました。部員全員が更に考え、話し合い、実践（普段の練習・大学生や県内外のチームとの練習試合）で結果を出すという繰り返しの中で、確実に私たちは自分たちが変わってきていると実感しています。その実感を公式戦の結果で出せるようにするのみです。

ところで、今までのサッカー部は、学校生活はさておきサッカーだけを一生懸命やっていたらいいという感覚が少なからずありました。が、このころではそれが結果としてグランド上での甘いプレーにつながっているということがわかってき

ました。自分たちの日頃の振る舞いが、グランドでのプレーにつながっているという当たり前のことが徐々に実感できるようになってきました。自分を磨き、仲間を信頼することをサッカーを通して本気で実践したいと思っています。その上で、私達は忙しい高校生活の中、湘南生としてやるべきことはしっかりとやり、たくさんの人に応援してもらえようというチームでありたいと思っています。

年明けから新人戦が始まりますが、どの大会でも優勝を目標に努力していきたいと思っています。まだまだ未熟な私達ですが、今後とも変わらぬ応援をどうぞよろしくお願いします。



今年、4月に赴任しました小林 周太郎（33）です。海老名高校→日本大学卒。前任は厚木北高校で8年間指導してきました。湘南高校をサッカーでも県下トップのチームに成長していけるように力を注ぎたいと思います。よろしくお願ひいたします。

日頃よりOBの皆様には多大なるご支援をいただきまして、大変感謝いたしております。是非、ご期待に応えられるチームにしていきたいと思えます。さて、4月に選手と初めておこなったミーティングで以下のような内容を話しました。『目標は、サッカーを通して社会の中心となって活躍する人間性を磨くこと。これからの日本を背負っていくだけの力をつけていってほしい。そして、実力をつけ勝つこと。湘南高校が勝つことで、サッカーの価値は必ず高まってくる。湘南が活躍すれば、それだけでサッカーは文武両道のスポーツと認められる、それは湘南にしかできないこと。そこを目指していこう。実現するには、よい選手が兼ね備えている、上手い・強い・速い・社会性、これをとにかく磨いていく。プロセスのある結果を追求していく姿勢を持つこと。挨拶・服装・頭髪など、自分達がどのように見られ、どのように評価されたいのか。その振る舞いは湘南生として他を常に意識することは大切なことだ』というようなことでした。

サッカー部で、質の高いサッカー・プラス思考・感謝の心・謙虚な姿勢・仲間の大切さ・責任感を身につけてほしいと思います。日々、選手と取り組んでいます。サッカーに関しては、ボールを大事にして判断しながらパスをつないでいくこ

と。対人でやられないこと。をテーマにしています。今年度の戦績は次の通りです。今後ともご支援よろしく願っています。

今年度 試合結果

関東大会二次予選

一回戦 対 高津 5対2
二回戦 対 藤沢西 0対2
インターハイ予選

一回戦 対 上鶴間 7対1
二回戦 対 横須賀大津 2対1
三回戦 対 武相 1対2
選手権一次予選

二回戦 対 平塚学園 2対0
三回戦 対 津久井浜 4対0
ブロック決勝 対 慶應藤沢 2対1

選手権二次予選

一回戦 対 逗葉 3対2
二回戦 対 横須賀 0対1

新人戦県大会出場(地区予選免除)

自己紹介

顧問 曾根 梓

今年度より顧問になりました曾根と言います。湘南高校に赴任して三年目になります。

教師生活は、今年で二十八年目になります。

前任校の相模大野高校で八年間サッカー部の顧問をしていました。久しぶりにサッカーに関わりを持つことが出来て嬉しく思います。

高校(東京都立国立高校)のとき、サッカー部に所属してから、もう三十数年が過ぎようとしています。サッカーは当時に比べ人口も増え、メジャーなスポーツとなりました。

サッカーの普及・発展には、湘南高校のOBの方々のご尽力があったことも聞いています。その伝統を持った学校でサッカーに関わることは身の引き締まる思いですが、余り気負わず自分のできる範囲でサッカー部に寄与していきたいと感じています。よろしく願っています。



11年間を振りかえって

二宮高校教諭 清水 好郎

11年前に、4年振りに湘南地区に戻り、湘南高校に赴任してみると、高校サッカーも様変わりしていました。湘南地区の公立高校のサッカーに関するレベルは低下し、私立高校の台頭が目立っていました。

湘南高校は藤塚先生の後、鈴木先生が面倒をみて下さり、引き継ぎがうまくいき、大変助かりました。生徒達は技術的に高く、県の上に食い込むことが出来ました。3年目には関東大会の代表決定戦まで進出出来たのが最高の成績でした。

技術の面ではキックの重要性を説いてきました。ボールは蹴るのではなく、腰で押す感覚、こする感覚、ダイレクトキック、1・5タッチキック、止めて蹴る早さなど、私流の考え方を伝えようと、かなり無理も要求しました。生徒達は、自分の思うように蹴ることの難しさを実感して卒業していったと思います。

DFのレベルは高いと思いました。特にサイドバックは、まずは守り、そして、センターリング、アーリークロス、タッチラインに平行に蹴る技術の難しさなど、私のサッカーの生命線でした。

その間には学校も変化していききました。8年前は学内外8%、6年前からは25%、4年前に学区は撤廃になり、徐々に旧学区内の生徒の減少による部員の減少がレベルの低下を招きました。また学校行事に打ち込む生徒が増え、レギュラーでも早々と引退する生徒が増えました。特にGKの経験者がいないため、GKで試合が決まることが多く、大きな悩

みの種でした。また、レギュラーチームと下級生のチームとの差が激しく、U17リーグとの兼ね合いが大変でした。現在はOBのGK経験者とBチームのコーチがいるのでその点は随分解消していると思います。

スペイン遠征については、予想以上の大きな成果がありました。いかに基本が大切か身にしみて欲しいために企画した遠征です。スペインの田舎町ビルバオで、同年代の子供達がどの様なサッカーをしているのか、人々がサッカーにどのように関わっているか、生活・風景など現地に行ってみて初めてわかるものだと思います。

今年の3月の遠征は、私としては、非常に複雑な心境でつらい遠征でしたが、生徒達は現地の高校生、また宿泊先のプレンシア街の人々のとも交流し、サッカー以外で、以前の遠征より充実したものになったと思います。

生徒達は、スペインの田舎町ビルバオと、大都会バルセロナ、パリを訪れて、得るものは大きかったと思います。この遠征を糧に世界に目を向けて欲しいと願います。この遠征後はある程度の成績を収めていると思います。湘南生でなければ出来ない遠征だと思いません。

私のような変人に付いてきてくれた

全ての生徒達に感謝します。スペイン遠征に同行してくれた、関さん、相羽さん、鈴木中先生にも大変お世話になりました。生徒の怪我に対しては、OBの加納先生、大沼先生にいろいろと便宜をはかっていただきました。敏速かつ適切な処置をしていただき、本当に感謝しております。

OB会の皆様には、会長様をはじめいろいろな方々に大変お世話になりました。この紙面を借りて衷心よりお礼を申し上げます。本当にありがとうございます。今後とも湘南高校の発展の為に、更なるご支援を賜りたいと存じます。長い間、誠にありがとうございます。ありがとうございました。

編集後記

今年の40雀には、吉岡さん(57回)、武井さん(60回)が加入、田中さん(62回)は、09年度から加入します。昨年、40歳前後の皆さん約100名にアンケートを同封しました。およそ1/4の返事がありました。ご協力ありがとうございました。数名の方は40歳になったら、ペガサスに参加したいという意向です。参加したいが、地方勤務だったり、少年を教えていて忙しいという方もいます。09年度は63回・中澤主将の学年が、10年度は選手権組が40歳となります。関はトトカルチョで活躍した皆さんの何人かに会いましたが、時間が許せば参加したいという方が多くいました。現在高齢化しているペガサスジュニアの世代交代を図る最大のチャンスだと思えます。仕事に家庭に忙しい時期とは思いますが、是非誘いあわせてサッカーに復帰してください。

もともと、この作業は浅倉さんがHP用に行なっており、1981年の記念誌は半分くらい、浅倉さんが実施し、HPに掲載しています。この作業を手伝っていただける方を募集します。スキャナーでスキャンし、テキストデータに変換し校正する作業です。自宅に設備があれば、1ページ30分あればできます。新しいプリンターにはこの機能がついているものも多いと思います。休日1日で、10ページから速ければ20ページいけます。これから半年の間で、3〜4日、30ページ程度を作業していただける方が10名いれば、作業は終了します。お手伝いいただける方、関まで連絡ください。

60歳になる先輩諸氏が還暦を祝う会を開催しています。今年は42回が幹事役となり、在学したときの前後5年間で参加、鈴木先生をお招きし、11月8日に開催しました。およそ40名が参加し、現役時代の話しで盛り上がったとのことです。2009年は43回が幹事となり開催予定だそうです。(48回 関)

OB会 掲示板

湘南高校サッカー部のHPでは、皆様の近況・情報・ご意見等の投稿を逐次UPしております。会報でも色々ご紹介したいと思しますので、仲間の情報、ご意見等、お気軽にお寄せください。毎年11月中に原稿をいただければその年の会報に掲載可能です。

◎中さんを囲んで「還暦の会」

11月8日(土)、藤沢産業センターにて、中さんを囲む「還暦の会」が開かれた。この会は、昭和41年正月の全国選手権出場メンバー(42回生)が幹事となり、前後2代に声を掛けて開催、当日は5代にわたり40名が参加、楽し、懐かし、3時間がアツという間に過ぎてしまった。還暦のお祝いとして42回生全員に、中先生から直筆の立派な「絵」が贈られた。

中先生の「絵筆の力」はアマチュアの域を超えており、先日、100枚目を描き上げたところ、40回生の君島氏が開いている「ネット画廊」にも出品しており、これからの楽しみである。

来年は、43回生が中心となり、「還暦」を合言葉に更なる参加者をつのりOB会

も盛り上げていこうと宣言した。(今回、お蔭様でOB会費も11万5千円集めさせていただきました。)



中心となった42回生と先生



42回生に贈られた絵

◎9、11月とOBが新聞紙上に登場したので簡単に紹介。

①会報にも投稿いただいた細川周平氏(48回生)の著書「遠き」にありつくるもの」の書評(9・28毎日新聞)

「遠き」について
著者 細川周平
発行 毎日新聞社

人間にとって故郷とはなにか
故郷とはなにか。それは、誰もが抱く疑問である。故郷とは、生まれ育った土地のことか。それとも、心に残る場所のことか。著者は、自身の経験を通じて、故郷の重要性を説き及ぼしている。故郷は、私たちの心を癒やし、支える存在である。故郷を離れて生きることは、決して容易なことではない。故郷を思い出すことは、自分を再発見するチャンスである。

②植松二郎氏(41回生)の著書、「テーブルの出来事」(幻冬舎)の出版広告
(10・30朝日、毎日、日経など)

植松二郎
テーブルの出来事
レストランで起きた出来事
本場の感動は、実話の中にある。
レストランスタッフが教えてくれた
話さないリアルな人間ドラマ。

③外務省北米課長などを経て、小泉政権で首相補佐官を務めた岡本行夫氏(39回生)が次期米大統領オバマ氏に関する座談会にて(11・7朝日新聞)岡本氏はその他TV・新聞に多々登場。

米大統領にオバマ氏 識者
「歴史を作る」市民
稲健な「王者の道」に戻る
岡本行夫氏
日本がシナリ

◎江ノ電藤沢・江ノ島・鎌倉駅売店で販売されている絵葉書。
榎山孝男氏(42回生)は会社勤務のかたわら「江ノ電」の絵を描きつけ、「あの頃の江ノ電」と題された水彩版画ポストカード8点が販売されている。
(単品¥160、5枚セット¥750)
現在、榎山氏はデザイン事務所を営し近々7点を追加予定。



蹴る人も、蹴らない人も旧交を…。

[蹴球祭・総会のご案内]

期日：2009年1月11日（日）

場所：湘南高校（グラウンド、清明会館）

普段サッカーをしていない方、運動不足の方も楽しめるマッチングをします。
ボールを蹴らない方も旧交を暖めに、是非、お越し下さい。

09：30～10：50 現役 vs トトカルチヨ
11：00～12：00 総会 幹事会はその前 09：30～
12：15～12：30 現役交歓会
12：30～13：30 食事、準備
13：30～15：30 40歳以上 OB紅白戦 2面使用

※本部受付はグラウンド横テント1ヶ所とします。（坂上は案内のみ）
本部に会長、事務局、鈴木先生がいるようにしますので、必ず立ち寄って下さい。
※受付は総会終了後12：00から開設し、会費納入と引き換えに弁当を配布します。

[平成20年度会計報告]

<収入>

会費	1,242,000
繰越金	538,124
利子	781
計	1,780,905

<支出>

現役寄付	350,000
蹴球祭	73,000
夏合宿補助	200,000
筑波大付属戦補助	30,000
スペイン遠征補助	600,000
通信・事務費	165,700
夏OB会	14,800
印刷費	128,100
会議費	3,553
繰越金	215,752

計 1,780,905

[平成20年度湘南サッカー部OB会予算案]

収入見込み	150名（社会人135名、学生15名）
	$100 \times 10,000 + 35 \times 5,000 + 15 \times 3,000 = 1,220,000$
繰越金	100,584
計	1,320,584円

支出	現役寄付及び遠征補助	600,000
	印刷費	120,000
	通信・事務費	150,000
	蹴球祭・夏OB会	90,000
	付属定期戦補助	30,000
	予備費	330,584
	計	1,320,584円

OB会寄付金 会計報告

<収入>

繰越金	150,000
寄付	350,000
利子	57
計	① 500,057

<支出>

選手お見舞い交通費	30,000
コーチ代	120,000
栄養講習・試合等食費	6,669
選手権プログラム代	30,000
ピブス代	13,114
合宿補助費	173,120
遠征手土産代	1,200
手数料	945
試合会場費	1,703

計 ② 376,751

①-② 123,306 繰越金

[21年度会費納入の件]

20年度は皆様の御協力ありがとうございました。本年もよろしくお願いたします。社会人の方は、できましたら2口以上の寄付をお願いいたします。

- ・社会人 1口 5,000円
- ・学生 1口 3,000円

蹴球祭当日、受け付けを致しますが、御欠席の方は同封の用紙にてお振込み下さるようお願いいたします。なお、下記銀行口座も受け付けていますのでご利用下さい。

横浜銀行 本店 普通預金
口座番号 019166
湘南高校サッカー部OB会

武藤俊一 TEL. 0466-34-9329

お問い合わせ・ご質問は

[ホームページアドレス]
湘南サッカー部OB会
<http://www.shonan-soccer.com>

[メールアドレス]
関 佳史（事務局）
seki6644@yahoo.co.jp
武藤俊一（事務局）
muto@tbc.t-com.ne.jp
横山雅行（事務局）
m-yokoyama@heiwa-sangyo.co.jp